国立民族学博物館
昭和52年10月5日第1号刊行　ISSN0386-2283
平成25年9月1日発行　第37巻第9号通巻第432号

月刊みんぱく

2013 9月号

特集◉美麗島——台湾

民族のモザイク　野林厚志
台湾の政治と中台関係　小笠原欣幸
ことばからみる台湾漢族の社会　上水流久彦
想像のふくらませ方　松岡格
台湾と沖縄　宮岡真央子

月刊みんぱく
平成二五年九月一日発行　第三七巻　第九号（通巻第四三二号）〈編集・発行〉国立民族学博物館
2013 9

記憶を形にし、継承していく
——介護現場から考える聞き書きの原点

六車 由実（むぐるま ゆみ）

先日、知り合いのケアマネジャーから、以前私が勤めていたデイサービスの利用者の山本一夫さん（仮名）が亡くなったと聞き、昨日お線香をあげにご自宅にうかがった。

私が出会った頃の山本さんは時々暗い表情で、「こんな年寄りになってただ生きているのは地獄同然だ」とつぶやいていた。大正一桁生まれで気骨のある山本さんにとっては、生活上のほとんどのことを他人の助けなしにはできないという現状に絶望していたに違いない。だが、聞き書きを始めると、「生き地獄」という絶望的な言葉とは裏腹に、山本さんは自身の波乱万丈の人生について雄弁に語ってくれた。とりわけ、農業の経験についての語りは実に詳細だった。馬喰（ばくろう）に高く買い取ってもらうために作業効率の悪い朝鮮牛を飼っていたこと、特産だったサツマイモの苗づくりのための「いもぐら」について等。そのすべてが私には初めて聞くことばかりで、聞き書きの度に民俗研究者の食指が動かされたものだ。山本さんも、自分の一代記を書いてほしい、と希望を抱くようになっていった。

そうして一〇回を重ねた聞き書きをまとめたものが、『山本一夫さん　思い出の記』である。山本さんがいう一代記になったかどうか自信はないが、出来上がったばかりの『思い出の記』を何度もめくっては目を潤ませていたのが印象的だった。その一方で、山本さんは、「息子たちも読んでくれるかな」とため息をもらしていた。きっと山本さんは、私に語りながらも、息子さんたちご家族に自分の生きてきた記憶を伝えたかったのだろう。『思い出の記』はご家族にも渡したが、ご家族からは特に感想などは聞くことはなかった。

突然訪ねた私を山本さんの家族は快く迎え入れてくれた。仏前にお線香をあげると、傍らにいたお嫁さんが当時の様子を教えてくれた。『思い出の記』を読んでみると自分たちの知らないおじいさんの生き方や思いが伝わってきたが、どう受けとめていいかわからないので、当時は感想もお礼も伝えられなかった。でも、おじいさんの葬儀で、『思い出の記』の一部を朗読してもらったら、改めておじいさんの人生はすごいな、と思えた、という。『思い出の記』を介して、山本さんの記憶と思いが家族に継がれた、そう私は確信した。

民俗学が聞き書きをする意義も本来はこれではなかったのか。生活者の記憶を形にして、継承していく。私は介護現場に身を置きながら、聞き書きの原点とは何かを考えている。

プロフィール
1970年静岡県生まれ。民俗研究者、デイサービスすまいるほーむ管理者。東北芸術工科大学芸術学部准教授をへて、高齢者介護の現場に身を置き、「介護民俗学」を提唱。
おもな著書に、『神、人を喰う——人身御供の民俗学』（新曜社。サントリー学芸賞）、『驚きの介護民俗学』（医学書院。旅の文化奨励賞）。

月刊 みんぱく
9月号目次

1 エッセイ　千字文
記憶を形にし、継承していく
——介護現場から考える聞き書きの原点
六車 由実

2 特集
美麗島——台湾
2 民族のモザイク——台湾　野林 厚志
4 台湾の政治と中台関係　小笠原 欣幸
5 ことばからみる台湾漢族の社会　上水流 久彦
7 想像のふくらませ方——台湾原住民族と日本
松岡 格
8 台湾と沖縄　宮岡 真央子

10 似たモノさがし
死者を弔うかたち
太田 心平

12 みんぱく Information

14 地球ミュージアム紀行
歴史を織りなすキルト
鈴木 七美

16 多文化をあきなう
マヤビニックと歩んだ一〇年、これからの一〇年
山本 純一、杉山 世子

18 フィールドで考える
知り合いを助ける、見知らぬ誰かを助ける
浜田 明範

20 人間学のキーワード
親密圏
加賀谷 真梨

21 異聞逸聞
中央アジアの日本人抑留者
藤本 透子

22 制服の世界、世界の制服
ダイビング・ショップのTシャツ
市野澤 潤平

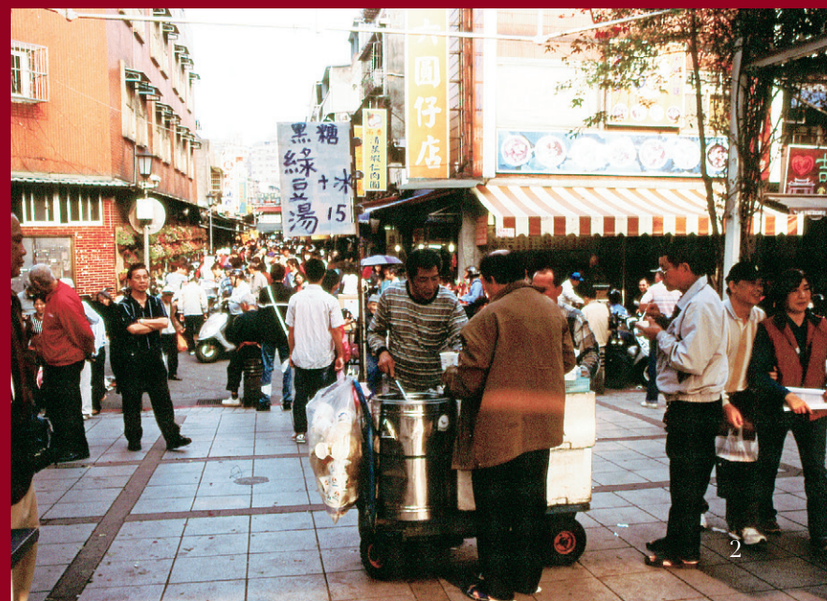
24 次号予告・編集後記

特集◉美麗島——台湾

台湾。
わたしたちにとって、台湾やそこに住む人びとはどれだけ近いのだろうか。日本時代の台湾を経験した世代にとっても、グローバル時代に生まれた世代にとっても、台湾の人にとって日本とは隣り合わせでありつづけているのだが。
企画展「台湾平埔族の歴史と文化」に関連して、ポルトガル語で「フォルモサ（麗しき島）」ともよばれる台湾の過去と現在を見つめる。

企画展
台湾平埔族の歴史と文化
場所　国立民族学博物館　本館企画展示場A
会期　9月12日（木）—11月26日（火）

台北龍山寺前の公園に面した通りのにぎわい（撮影・野林厚志）



民族のモザイク——台湾

野林厚志（のばやしあつし）　民博研究戦略センター

台湾独立をうったえる市民デモ

クヴァラン族のバナナ製織布と製作者

平埔シラヤ族の阿立信仰。漢族とは異なる要素が含まれる

日本のことに詳しい隣人たち

東日本大震災に際し、台湾から多額の義捐金（ぎえんきん）がよせられた。その多寡が人びとの思いを反映するわけではないが、被災地のおかれた状況に心を動かされた台湾の人びとが相当いたことは事実であろう。台湾は地震や台風の多い国で、被災の苦難を人びとがよく理解していることに加えて、台湾の人びとは日本そのものに対する関心が高く、日本の様子をよく知っているということが背景にあると筆者は考えている。

台湾のテレビ放送はケーブル化が進み、チャンネル数はゆうに一〇〇をこえる。いくつかのチャンネルでは日本の番組が二四時間放映されている。今、日本で何が起こっているのかを台湾人は容易に知ることができる。翻って、日本はどうだろう。華流とよばれる台湾ドラマが一部の地方局で放映されるものの、ニュースやスポーツ、バラエティのような台湾の日常をうつしだす番組を目にする機会は限られている。台湾と日本との隣人関係には、相手に対する関心や知識の不均衡が少なからず存在する。

台湾の多様な民族構成

台湾のことを「中国人」と「高山族」とが住む「地域」と理解している人は少なくない。これは必ずしも正確ではない。台湾の多くの人びとは自分たちのことを台湾人とよぶ。台湾は、国際連合（等の国際組織）には加盟していないが、非公式な外交関係を諸外国と結んでいる自律的な国家である。

九州ほどの面積の国土に住む約二三〇〇万人の人口の九〇パーセント以上を占める漢族系の人びとは、一六世紀ごろから大陸部から移住し台湾に定着してきた通称、本省人と、第二次世界大戦後に国民党政権とともにわたってきた外省人とに大きくわかれる。本省人のなかには広東からの客家（はっか）と福建省からのいわゆる閩（びん）南（なん）人が存在し、おたがいに別々の民族であるという意識が強い。

外省人は第二次世界大戦後、数十年間にわたり政治的優位を保ってきた。彼らの権力の濫用は二・二八事件とよばれる武力弾圧とそれに続く戒厳令を引き起こした。政治的に自由な発言が社会のなかで安心してできるようになったのは、一九八〇年代以降、民主化の流れが軌道にのってからのことになる。

外省人の政治的支配に対して声をあげたのは本省人だけではなかった。オーストロネシア系の先住民の人びとは台湾社会のなかで民族としての尊厳と文化の尊重を主張しはじめた。「原住民運動」とよばれる社会運動を展開し、日本統治時代の高砂族、戦後の山胞（さんぽう）（山地同胞）といった他者からの呼称とは異なる、もともとの住民という意味の原住民族という呼称をえるにいたった。ちなみに高山族というのは、大陸中国でのよび方であり台湾では一般的ではない。

日本統治時代の足かせ

本省人たちの政治主張、原住民族の権利運動のはざまで、エスニシティを再興させようとしてきたのが平（へい）埔（ほ）族とよばれる人たちである。彼らはもともとは西部平野に住んできた先住民族で、漢族化が早くからすすんでいたことから、日本統治時代には高砂族には分類されなかった。この事は後々に彼らの立場を複雑にすることになった。

台湾の中央政府は原住民族であるかどうかの認定を、原則として日本統治時代に本人もしくはその直系の親族が特別行政区の住人であったかどうか、すなわち高砂族であったかどうかを基準にしてきた。日本統治時代に高砂族ではなかった人たちとその子孫は制度のうえで、原住民族にはなれず、平埔族の人びとはまさにその境遇にある。

平埔族を自称する人たちは制度上の不備を批判すると同時に、自分たちが平埔族のなかのさらに固有の民族集団であるという主張を、継承してきた信仰の実践や歴史史料をてがかりに社会に対して訴えてきた。一方で、山胞の一員であるなどとは一言も言わなかった人たちが今になって、自分たちも原住民族であると主張するのはいかがなものかと冷ややかな態度で、平埔族の主張をとらえる人たちも少なくない。

台湾内部では平埔族の原住民族性については賛否両論あるが、こうしたことを引き起こした原因の一端が日本統治時代の政策にあったということは気に留めておきたい。日本人研究者がおこなった民族分類が日本統治時代の政策に反映され、それが現在のエスニシティのゆくえに少なからぬ影響を与えているのである。

台湾の政治と中台関係

小笠原欣幸　東京外国語大学准教授

台湾が事実上の国であることを象徴する総統府（大統領官邸）。中華民国国旗がはためく

台湾と中国の違い

二〇一二年一月、台湾で総統（大統領）直接選挙が導入されてから五回目の総統選挙がおこなわれた。これまでの当選者は、一九九六年が国民党の李登輝、二〇〇〇年と〇四年が民進党の陳水扁、そして〇八年と一二年が国民党の馬英九である。

奇しくも二〇一二年は、台湾の総統を選ぶ選挙と中国の最高指導者を選出する中国共産党大会とが同じ年に実施された。四年周期の台湾総統選挙と五年周期の中国共産党大会が同じ年になるのは二〇年に一回である。

台湾では投票の八ヶ月前に与野党の総統候補者が決まり、お互い政見を発表し熾烈な批判を繰り広げながら選挙戦を戦う。その間多数のメディアからあらゆる疑問・弱点を追及され、その見識と対応能力とが試される。そして最後は選挙民一人一人の票によって決着がつく。

他方、中国の最高指導者の人選は事前に予想されているとおりになるのだが、どのようにしてその人物に決まるのかはまったくわからない。つまり密室で決まり、国民が関与することはない。

かつては台湾でも国民党がコントロールする国民大会が総統を選出していた。また、自由も制限され、体制を批判した人は今日の中国と同じように投獄されていた。台湾でそのような時代に戻りたいと考えている人はほとんどいない。最高指導者を選ぶ方法の違いは中台の政治的立場の違いを雄弁に物語る。

中台の駆け引き

台湾の民意は圧倒的多数が現状維持を求めている。他方、中国ではほとんどの人が台湾との統一が当然であると考えている。中国は一党支配体制を維持しながら急速な発展を遂げ、いまや経済力でも政治力でも軍事力でも台湾を圧倒している。台湾の自立の空間は確実に狭まっている。しかし、だからといって中国が簡単に台湾をまるめこめるわけでもない。

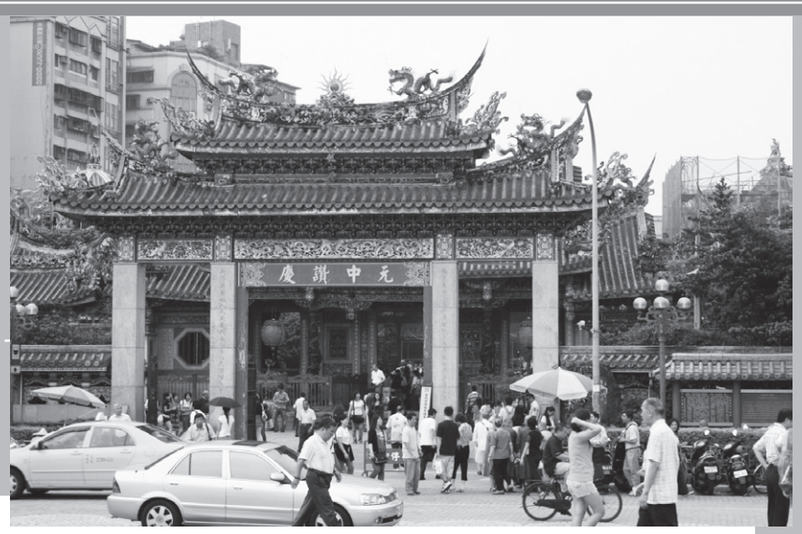
馬英九政権は「九二年コンセンサス」という玉虫色の合いことばを使って中国との関係を改善させた。中国は、台湾独立を目指す民進党政権に対しては遠慮なく締め付けるが、中国性を看板に出す国民党政権に対しては対応を緩くしている。中国にとって中華民国を認めることはできないが台湾独立よりはましなので、経済的利益で台湾側を取り込みたいと考えている。

馬英九はそこをついて、中国から経済的利益を引き出しつつ、米日との関係強化で背後を固め中国からの圧力に備えている。発足した習近平指導部は、台湾統一に向けて少しでも現状を動かしたいと考えている。中台の国力の差からすると現状を維持すること自体が非常に難易度の高い任務である。台湾はしたたかにふるまわなければならない。台湾の将来をめぐって中台の複雑な駆け引きがこの先も続く。

台湾の地方都市のホテルにも大勢の中国人観光客が押し寄せる

ことばからみる台湾漢族の社会

上水流久彦　県立広島大学講師



台北市萬華にある龍山寺。現在は多くの台湾の人びとの信仰を集めるが、本来は閩南系本省人のお寺

台湾のことばは中国語？

「台湾のことばは何ですか」とよく聞かれる。わたしは「国語はいわゆる中国語です」と答えるものの、少し迷う。原住諸民族にも独自のことばがあり、漢族にもあるからだ。閩南系本省人は閩南語を話す。台湾では台湾語（中国語で「台語」や「台湾話」）ともいわれる。日常的に使われるが、みんなが話せるわけではない。そのためこんなことも起こる。中華民国建国一〇〇周年（二〇一一年）記念の花火を見るために大晦日の夜、花火が見える高校に集まった。わたしはその高校で働く台湾の知人とその母と見に行った。そこに校長先生があらわれ、知人の母があいさつをし、「もう八〇歳です」と閩南語で自己紹介した。だが、校長先生はまったく聞き取れなかった。校長先生は外省人第二世代で、戦後国民党が国語として教えた中国語しか話せない。外省人には中国語が苦手な第一世代もいるが、それでも「外省人は中国語の発音が『標準的』」と台湾では考えられており、学校や官庁に加え、マスメディアで働く者も少なくない。

台湾ナショナリズムがもっとも高揚した陳水扁総統時代の総統府前の国慶節祝賀会。台湾の文字が見える

「台湾国語」という引け目

「八〇歳です」とあいさつした女性は中国語が話せないわけではない。だが、苦手である。日本語教育世代の彼女は植民地統治のもと日本語教育を受け、閩南語に次いで日本語が得意である。だが、成人してなんとなく聞きかじって覚えた中国語は話したがらない。彼女らが話す中国語は流暢（りゅうちょう）ではなく「台湾国語」と揶揄（やゆ）される。そう揶揄されるのは、日本語教育を受けた世代の中国語だけではない。わたしの知り合いの夫婦は夫が閩南語で、妻が中国語で話している。夫は学校で中国語を習ったが、閩南語が日常的に使われている台湾南部の出身だ。一方、妻は中国語がよく使われる台北の生まれ・育ちであった。閩南語にはないそり舌音が不得意な夫がたまに中国語を話すと妻に発音を注意されることもあるそうだ。閩南語の影響の強い中国語も「台湾国語で標準的でない」とされる。

世界一高かった101ビルと手前は外省人の軍人の集合住宅。いわゆる眷村（けんそん）。すでに人は住んでいない

「閩南語を国語に」!?

一方で台湾独立を主張する閩南系本省人のなかには中国語ではなく閩南語を国語にすべきだと語る者がいる。閩南語が台湾でずっと使われ、大多数が話すからだという。だが、その声に反対する者も多い。外省人もそうだが、客家（はっか）系本省人も同様である。同じ漢族でも彼らは彼らで独自のことば、いわゆる客家語を話す。そして彼らは閩南語を国語どころか、台湾語とよぶことにも反発し、「台湾語というなら台湾に元々住んでいた原住民（族）のことばではないか」という。「客家語こそが中国のもっとも伝統的なことばだ」とも語る。

みんなが言語マイノリティに

国語が得意な外省人でも立場は安泰ではない。台湾ナショナリズムのもと、台湾にいるなら台湾語（閩南語）が当然だと閩南語だけで話されて戸惑う外省人の知人もいた。一方で国語教育の普及で若年層には中国語しか話せない者も増えた。そのような孫と会話するために社会人大学で中国語を学ぶおばあさんをわたしは知っている。日本語教育世代の彼女は中国語を結局それまで覚えてこなかった。若年層は若年層で閩南語など親のことばすら話せないと責められもする。現在学校で母語教育があるが、その効果は十分ではない。このように台湾ではことばについて誰もがマイノリティになりえる。下手な中国語を話すわたしに台湾の友人がときに少し優しいのはそんな言語環境だからではないか。わたしはそう感じている。

2011年1月1日に総統府前で中華民国建国100年を祝う人びと。台湾独立派からは反発も招いた

想像のふくらませ方
―台湾原住民族と日本

松岡格（まつおかたかす）　獨協大学准教授

ある教会での結婚式の一コマ。この教会内部の十字架が目立つ

パラレルワールド?

台湾で、先住民族の暮らす山地にいると、ここは日本のパラレルワールドではないかと、感じることがある。

先住民族は、台湾では原住民族とよばれている。わたしは原住民族のなかでも、台湾南部のルカイ族やパイワン族が暮らす地域（特に三地門郷周辺）でよく調査をしている。そのルカイ族・パイワン族に限らず、原住民族にはキリスト教徒が多い。例えば家族で食事をする際、食前に祈祷（きとう）をする。野外で行事をする際にも祈祷をすることが多い。そうした祈祷の際、わたしはキリスト教徒ではないので、失礼ながら、ただ聞いているだけである。その祈祷のことばはほとんど現地語（ルカイ語やパイワン語）で話されることが多い。わたしとしては、それを音として、神様は「ツマス」と言うんだな、などと聞いていると、突然そのなかに「イ・ノリ」（「ノ」にアクセント）ということばが出てきたりする。どうやらこれは「祈り」という日本語だろう。こういう例は数多い（例えば「村長」「議員」など）。

山地の村では、毎日夕方ころになると、ご近所同士が集まってカラオケ大会を始める。もしくは一杯飲んでから興が乗ってくると、カラオケバブに繰り出すことになる。結婚式の際にも欠かせないのがこのカラオケである。そこで、日本の歌がよく登場する。だいたい歌謡曲や演歌である。そのまま日本語で歌われる場合もあれば、中国語の替え歌の場合もある。

つながりからつむがれるもの

こうした日本由来のコトバやウタが、いつ、どういうルートで原住民族の生活に入り込んできたのか、調べようと思っても容易なことではない。しかしここでもう少し考えてみると、ひとつ挙げられるのは人の流れである。

一九四五年のいわゆる終戦の後、戦前に台湾で暮らしていた日本人（「内地人」）の多くは日本へと引き揚げてきた。しかし、そのあともし

披露宴の後に、踊る参加者に酒を振る舞っているところ

ある結婚式の披露宴の会場。画面奥が舞台に当たる

台湾と沖縄

宮岡（みやおか） 真央子（まおこ）
福岡大学准教授

ばらく台湾にとどまっていた人たちもいる。また、一度日本に引き揚げたのち、台湾を再訪して、台湾の友人と旧交を温めた人も数多い。そこから継続的な交流に発展したケースもある。そのように台湾と日本のあいだを行き交う人の流れのなかで、原住民族と日本人のあいだのつながりが復活したり、誕生したりする場合もある。

わたしの調査してきたパイワン族・ルカイ族には、日本人と結婚した人も少なくない。戦前の、正式な婚姻が成立していたのかどうかよくわからないケースから、戦後の、相手の日本人の方と直接連絡がつくようなケースまで、さまざまである。

原住民族の人たちと日本との交流は多岐にわたる。例えば野球をめぐる交流では、台湾から日本に向かう人の流れを生み出している。台湾にも野球のプロリーグがあり、原住民族は多くの選手を輩出している。プロ野球チームの選手として、日本に渡った選手も数多くいるのである。歌手や芸能人などで似たようなケースもある。

原住民各民族の民族衣装（の現在の様式）が、外部との交流なしには生まれていないことはよく知られている。博物館の展示に目を向ける際には、このような外部との交流が、原住民族や、その文化にどのような影響を与えているのか、展示されていないことも含めて想像をふくらませて見てみるのも面白いかもしれない。

民族衣装を縫っているところ。やはりビーズや銀細工を多用

女性の民族衣装の胸元に光るビーズや金属製の飾り物に注目

距離

学生のころ、宮古諸島での調査の往復に船をよく利用した。船は安いし、距離を実感できる。那覇から宮古・石垣を経由して台湾の基隆（キールン）や高雄に向かう定期連絡船で、このまま乗っていたら台湾へ行けるなと思いつつ、ついぞ台湾までの船旅をすることはなかった。台湾と沖縄の距離を少しだけ実感したのは、その後、東京に留学中の台北出身の友人と宮古へ出かけたときのことだ。池間島で、漁師さんは「台湾は大きな島だよね」と言った。お年寄りは、戦時中台湾へ疎開したときの思い出と後日当時の知人と再会したときの喜びを語った。東京から来た友人は「ここは台湾にとても近い」とうれしそうに笑った。

台湾の基隆と石垣・那覇を結ぶクルーズ船。
1997年から夏期を中心に運行されている

この近さは、八重山諸島へ行けばもっと顕著だ。最西端の与那国島から台湾までは約一一〇キロメートル、年に数日は台湾の大きな島影が望める。ただし、友人のいう「近さ」とは物理的距離の長短だけによるものではない。むしろそれは、人の往来や交流をともなう「親しさ」に近い感覚だったのだと思う。

半世紀間の往来

かつて台湾が日本の植民地だった半世紀間、沖縄、とりわけ八重山の人たちにとって、台湾はもっとも身近な都会であり、多様な機会に恵まれた場所だった。進学、就職、資格取得などのため多くの人が台湾へ向かった。与那国島では、学校を卒業すると台湾で仕事に就くのが当たり前だった。沖縄各地の漁村からは、東部の漁村に移住がおこなわれた。現在の台湾東部の漁法や漁具には、沖縄漁民の技術が継承されている。他方、台湾から八重山への出稼ぎや移住もあった。西表島の炭鉱では過酷な労働が強いられた。石垣島には昭和期に台湾からの開拓者が数百人規模で入植した。台湾からもたらされた水牛やパイナップル栽培は今ではすっかり八重山の景観に溶け込み、台湾系住民のコミュニティも健在だ。また、池間島のお年寄りのように太平洋戦争末期に台湾へ疎開した人は、宮古・八重山を中心に一万人以上にのぼった。そして一九四五年、台湾と沖縄とのあいだには国境線が引かれた。その後数年間、この海域では「密貿易」が盛んにおこなわれ、その中継基地となった与那国島は空前の好景気に潤った。

「近さ」の回復に向けて

台湾でも沖縄でも、こうした時代を直接経験した人はもはや少なくなり、ことばも通じない。往来の記憶は遠いものになりつつある。しかし、これらの経験と記憶を頼りに自治体は交流の道を探り、台湾東部の花蓮市と与那国町（一九八二年）、蘇澳（スオウ）鎮と石垣市（一九九五年）、基隆市と宮古島市（二〇〇七年）のあいだで姉妹都市協定が締結されている。また石垣市は、二〇〇九年から台北のある国立大学と提携して留学生派遣を開始した。台湾東部と八重山・宮古地域間の経済活動促進を目的とする民間団体主催の会合も近年開催されている。

残念ながらあの定期連絡船は、船会社が倒産し五年前に廃止された。しかしそれと相前後するように、今度は基隆から石垣・那覇への豪華なクルーズ船が往来している。いま、台湾と沖縄を結ぶ海域では、あらたな形での交流や人の往来、そして「近さ」の回復が模索されている。

上：クルーズ船で石垣におりた観光客が浴衣を着た台湾人女性と記念写真
左：石垣市役所前にある石垣市と蘇澳鎮の友好親善の碑。1995年に姉妹都市の締結がなされた
※3点とも撮影・上水流久彦

似たモノさがし

似てるけどどこか違う
似てないようでどこか似てる
いろんな工夫や思いを映す
みんぱくの所蔵資料

死者を弔うかたち

太田 心平（おおた しんぺい） 民博 民族社会研究部

文化人類学者・民族学者にとって、葬送や埋葬は古くから特別な関心対象だった。人類は集団によって文化が異なるが、どの集団も人の死に何らかの意味づけをし、人が死んだらどうなるかという疑問に、何かしらの答えをもつからである。

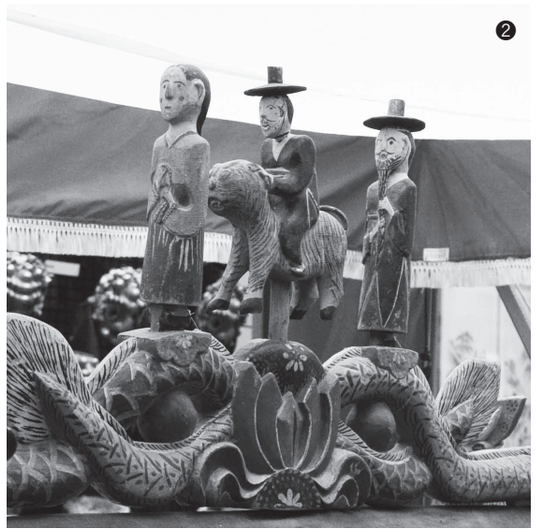
民博の常設展示を回っても、各地の「死者を弔うかたち」が見て取れる。たとえば、朝鮮半島の伝統的な葬送では、輿（こし）に「木偶」とよばれる飾りを付ける習わしがあった❷。死者を送るに際し、木で作った人形や動植物を、せめてもの「連れ」として付けてやるのだ。

南アフリカのザンビアに暮らすチェワの人びとがおこなう葬送には、「ニャウ・ヨレンバ」という被（かぶ）り物が登場する❸。演じ手たちの秘密結社は、喪明けの儀礼でこれを被って踊る。秘密結社に属さない人たちは、森の動物が死者の霊を森へと誘うため来てくれたのだと歓迎する。いずれの標本資料にも、死者の孤独な旅路に便宜をはかってやろうという共通の認識が、モノとして表れている。

埋葬具も同様だ。伝統的な装飾が描かれたアボリジニの棺（ひつぎ）からも❺、ニューギニアの葬送で死者の魂を収める容器からも❹、マレーシアのオラン・ウル社会の墓柱からも❶、愛する者の遺体を無碍（むげ）に放置するわけにはいかないという共通の認識が伝わってくるようだ。また、どれも、それぞれの地域の人びとが死についてもつ、心のなかのイメージを具現化させたモノ、すなわち、認識が物体になったと思わせる。

しかし、順序を逆に考えることも出来る。こうしてモノがそこにあるからこそ、その地域の人びとは特定の死生観を共有し、伝承することが出来る、と。木偶というモノが存在するから、人びとは死者に同行者を付けようとし、ニャウ・ヨレンバは秘密結社に存在意義を与える。埋葬具の模様は、死のイメージを世代から世代へと伝える。「死者を弔うかたち」は、「生者を弔いに誘うかたち」でもあるのだ。

死とは、存在がなくなることである。死の先には、本来は何も存在しない。だから、ともすれば人びとは死に向きあう術（すべ）がない。ここで挙げた標本資料たちは、その空白をきちんと埋めつくしてくれる。こうしたモノの存在が、人間社会において死という現象を律してくれるのである。



❶墓柱、マレーシア（民族：オラン・ウル）、直径 32 × 高さ 295㎝、H0168197

❷喪輿（死者運搬用輿）についている木偶、韓国、長さ 525 × 高さ 190㎝、H0214826

❸ニャウ・ヨレンバ（ハイエナ）、ザンビア（民族：チェワ）、幅 78 × 長さ 203 × 高さ 169 cm、H0168242

❹彫像（ウリ）、パプアニューギニア、幅 13 × 奥行 13 × 高さ 59cm、H0144385

❺柱状棺（遺骨入れ容器）、オーストラリア（民族：アボリジニ）、直径 21 × 高さ 202cm、H0085787

特別展
「渋沢敬三記念事業　屋根裏部屋の博物館――Attic Museum」

日本銀行総裁、大蔵大臣を歴任した渋沢敬三はまた、邸内に私設博物館兼研究所を設立した民俗学者でもありました。本展では、渋沢敬三の経歴と民俗学研究を紹介します。

会期　9月19日（木）～12月3日（火）
会場　特別展示館

■関連イベント

◆公開シンポジウム
「渋沢敬三を語る――偉大なる学問の庇護者」

井上潤（渋沢史料館 館長）
内田幸彦（埼玉県立歴史と民俗の博物館 主任学芸員）
武田晴人（東京大学大学院 教授）
宮本瑞夫（宮本記念財団 理事長）
久保正敏（本館 教授）
日時　10月13日（日）
13時30分～16時30分（13時開場）
会場　講堂（定員450名）
※申込不要、参加無料
※当日10時から講堂入口にて整理券を配布

企画展
「武器をアートに――モザンビークにおける平和構築」

モザンビークでは、内戦終結後に回収した武器でアートの作品を作りだすという事業が進んでいます。アートを通じて平和を築く営みを紹介します。

会期　11月5日（火）まで
会場　企画展示場B

企画展
「台湾平埔族の歴史と文化」

台湾の平埔族の人びとが歴史資料、博物館資料をてがかりに、民族のアイデンティティを再構築していくようすを紹介します。国立台湾歴史博物館との国際連携展示です。

会期　9月12日（木）～11月26日（火）
会場　企画展示場A

みんぱくワールドシネマ
「再会の食卓」

歴史的・政治的状況の中で離散していた家族の、長年を経た再会のドラマを通して、現代社会の中で離れて生活をしていかざるをえない家族のゆくえを、皆さんとともに考えていきます。

日時　9月15日（日）
13時30分～16時（13時開場）
会場　講堂（先着450名）
※申込不要、参加無料
※当日10時から講堂入口にて整理券を配布

研究公演
「共振する大地のリズム――ブルキナファソ・カバコと佐渡・春日鬼組の競演」

アフリカ、ブルキナファソのグワンの人びとの間に継承される葬送儀礼の楽士として育ったバラフォン奏者ムッサ・ヘマ率いるグループ「カバコ」と、佐渡「春日鬼組」の競演を通じて、大地と生活に密着して生み出される音の世界を体感できます。

日時　11月3日（日・祝）
13時30分～15時30分（13時開場）
会場　講堂（先着450名）
申込締切　10月10日（木）必着
※事前申込制、参加無料

みんぱく×MBSラジオpresents
「行って！わかった！これがびっくりリアル世界だ。」

「60日間ほぼ世界一周」河田直也さん（MBSアナウンサー）と、「狩猟採集民をおって世界をめぐる」本館教授池谷和信によるトークイベントです。司会は、古川圭子さん（MBSアナウンサー）です。

日時　9月16日（月・祝）
13時30分～14時30分（13時開場）
会場　講堂（定員450名）
※申込不要、参加無料
※当日10時から講堂入口にて整理券を配布

みんぱく手話言語学フェスタ2013

◆語順と数（すう）に関する国際ワークショップ
日時　9月27日（金）9時20分～18時
会場　第4・5セミナー室（定員80名）
※事前申込制、参加無料

◆言語の記述に関する国際ワークショップ
日時　9月28日（土）9時～12時45分
会場　第4セミナー室（定員80名）
※事前申込制、参加無料

◆みんぱく映画会
「白塔」

ふたりのろう者の恋愛から結婚を描いた本作品は、私たちに等しく与えられたコミュニケーションという日常の営みを映し出しています。上映を通じて、ろう者側からみた手話や社会について考えます。

日時　9月28日（土）
13時30分～16時45分（13時開場）
会場　講堂（定員450名）
※申込不要、参加無料
※当日10時から講堂入口にて整理券を配布

◆手話言語と音声言語についての国際シンポジウム（2）
「言語の語順と文構造」

日時　9月29日（日）9時～17時
会場　講堂（定員450名）
※事前申込制、参加無料

●無料観覧日のお知らせ

9月14日（土）は万国博覧会閉幕記念のため、9月16日（月・祝）は敬老の日のため、本館展示を無料で観覧いただけます。ただし16日については自然文化園（有料区域）を通行される場合は、入園料が必要です。

※各イベントについてくわしくはホームページをご覧ください。
※電話でのお問い合わせの受付時間は、9時から17時（土日祝を除く）です。

訃報　近藤雅樹教授

みんぱくの近藤雅樹教授が、本年八月三日に急逝されました。近藤教授は、民俗学者・宮本常一の高弟として民俗学研究の王道をあゆみ、一九九〇年三月にみんぱくに就任して二〇年余、一貫して日本研究、民具研究、物質文化研究を主導するとともに、渋沢敬三の民俗学に傾倒し、みんぱくの基礎資料であるアチックミューゼアム・コレクションの整理・分析に邁進してこられました。その総決算として心血をそそいだ特別展「屋根裏部屋の博物館」実現というご遺志を生かすべく、みんぱくが一丸となって準備を進めております。なお、関連催し物の一部についての余儀ない変更をあらかじめお断りいたします。

近藤教授は、本誌の編集委員を長年勤め、味わい深い記事を連載するなど、本誌にも多大な貢献をいただきました。あらためて感謝するとともに、深く哀悼の意を表する次第です。

みんぱくゼミナール

会場　国立民族学博物館 講堂
時間　13時30分～15時（13時開場）
定員　450名（当日先着順）
参加費　無料（展示をご覧になる方は、観覧料が必要です）

第424回　9月21日（土）
【特別展関連】
屋根裏部屋博物館主人の横顔
講師　飯田卓（国立民族学博物館 准教授）
木村裕樹（龍谷大学 非常勤講師）
永井美穂（渋沢史料館 学芸員）

渋沢敬三（『柏葉拾遺』より）

青年時代に友人たちと一緒にコレクションを持ち寄り、ガレージの屋根裏で博物館ごっこをしていたのが渋沢敬三でした。生物学者になるのが夢でした。長じてからは邸内に本格的な博物館兼研究所を建て、若い研究者たちの育成にも心を砕いた渋沢の一面についてお話しします。

第425回　10月19日（土）
【企画展関連】
心の武装解除――モザンビーク「武器をアートに」プロジェクトを考える
講師　吉田憲司（国立民族学博物館 教授）

みんぱくで収集した作品（いのちの輪だち）の制作　2012年10月

アフリカのモザンビークでは、内戦終結後も大量の武器が民間に残されました。その武器を農具や自転車と交換して回収し、武装解除をはかるとともに、回収した武器を素材にアートの作品を生み出して、平和を人々の心に定着させようというプロジェクトが進められています。そのプロジェクト「銃を鍬に」の意義を考えます。

友の会

国立民族学博物館友の会　電話 06-6877-8893（平日9時～17時）　FAX 06-6878-3716
http://www.senri-f.or.jp/　　e-mail minpakutomo@senri-f.or.jp

友の会講演会（大阪）
会場　国立民族学博物館 第5セミナー室
定員　96名（当日先着順、会員証提示）

第424回　10月5日（土）14時～15時
【特別展関連】
渋沢敬三の「民具」へのこだわり
講師　小島摩文（鹿児島純心女子大学 教授）

アチックミューゼアムの設立者、渋沢敬三は日本銀行総裁や大蔵大臣をつとめる一方、膨大な量の民俗資料を収集し、毎朝、出勤前の2時間を民俗学の研究にあてるなど、地道な研究をおこなう学者、文化人としても熱心に活動していました。民具という考え方を提唱したのも渋沢敬三でした。彼がそれほどまでに民俗学に傾倒した事情や社会的背景などについてお話しします。

第425回　11月2日（土）14時～15時
くすりの民族学
講師　小山修三（千里文化財団 理事長 国立民族学博物館 名誉教授）

第67回体験セミナー
ニッポンの漆を考える――世界最古の漆発見の地・鳥浜貝塚と越前漆器
10月26日（土）～27日（日）1泊2日
訪問先：若狭三方縄文博物館、片山漆器神社、うるしの里会館ほか

第83回民族学研修の旅
ベトナム西北部　少数民族の世界へ
11月21日（木）～29日（金）9日間
訪問先：ベトナム（ハノイ、マイチャウ、ソンラー、サパ）
少数民族の村の訪問や市場めぐり、高床式の民家での宿泊も予定しています。
※体験セミナー、民族学研修の旅ともに詳細は上記友の会までお訪ねください。

国立民族学博物館ミュージアム・ショップ

電話 06-6876-3112
FAX 06-6876-0875
e-mail shop@senri-f.or.jp
水曜日定休

ウェブサイトもご覧ください。
オンラインショップ
「World Wide Bazaar」
http://www.senri-f.or.jp/shop/

中国上海の「金山農民画」

今回は、中国上海の農民たちが一枚一枚手で描いた小さな民間芸術「金山農民画」をご紹介します。農民画の起源は人民公社時代の農業振興や新技術の広報普及を目的としたポスターで、1950年代の陝西省ではじまりました。1970年代に上海近郊にある農村、金山で、それまでのスタイルを刷新し、中国刺繍（ししゅう）の色使い、伝統的な切り絵をベースに、立体感を排除した平面的な構成を取り入れるようになります。

「生活に根ざした絵」「郷土の香りのする絵」として知られる「金山農民画」。どこかに懐かしさを感じる絵画を、どうぞお楽しみください。

金山農民画
小（22×22cm）　6,090円
大（37×37cm）　8,400円
※サイズは額装を含めたもの

価格はすべて税込

地球ミュージアム紀行

歴史を織りなすキルト

女性たちがキルトに織り込んだ、さまざまなメッセージ。
一枚一枚が集まり、コレクションとなったとき、
アメリカという国の歴史を語り出すのかもしれない。

鈴木（すずき） 七美（ななみ）
民博 先端人類科学研究部

唯一の大学付置キルト研究センター・博物館

インターナショナル・キルトスタディセンター・アンド・ミュージアムは、アメリカ合衆国ネブラスカ州リンカーンにあるネブラスカ大学付属のキルト研究センター・博物館である。「キルト・ハウス」とよばれるその建物自体が、三つの層をもつキルトをイメージしており、内部は、自然の光のなかでキルトを感じることができる回廊や空間から構成されている。唯一の大学付置キルト専門博物館として、世界のキルト収集とその研究を推進してきた。世界各地から訪れる研究者、コレクター、ディーラー、そして一般市民もともにキルトを味わい、情報を交換する場となっている。入り口付近には市民が作成したキルトも展示されており、展示の説明にも市民ボランティアが活躍している。

世界各地から収集されたキルトは、昆虫やゴミなどを取り除き、情報収集や共同研究などの過程を経て保存される。キルトの保存には化学薬品は使用せず、密封した部屋に静かに数ヶ月置いておき、出てきた昆虫を専用の掃除機で吸い取る方法をとっている。研究に際しては、何枚ものキルトを同時に広げることができるゆったりした部屋で、キルトのまわりに人びとが寄り集まり議論を重ねている。また、キルトの写真を撮影する地下の部屋は、この地域で頻発する竜巻などの際のシェルターを兼ねている。

ミュージアム・ショップでは展示に関する書籍のほか、ミュージアム・グッズとして、待ち針をモチーフにしたショルダーバッグとポシェットのセットを販売している。センターの研究者たちが、自分たちが使いたいデザインにこだわって開発したものだという。

コレクション

収蔵品の数は三五〇〇点を超え、公共機関が有する世界最大規模のものとなっている。その元となっているジェイムス・コレクションは、一九世紀後期からのアーミッシュとメノナイトのキルトが大部分を占めており、その大多数は、オハイオ州やインディアナ州を中心に、中西部のものである。そのうちの一〇〇以上ものキルトが、「スタジオ・アート・キルト・ムーヴメント」（伝統的なパターンや色に基づく製作法に従うのではなく、新しいアートとしてのキルトを創造しようとする一九六〇年代以降の活動）のなかで生み出され、ワシントンDCのテキスタイル博物館をはじめ著名な博物館で展示されたほか、東京国際フォーラムでも展示され、一〇万人を動員した。

カーゴ・コレクションは、主としてアラバマ州のアフリカンアメリカンの女性たちが作った二五六のキルトから構成される。サラ・ミラー・コレクションの九九のアーミッシュ・クリブキルト（子ども用ベッドカバー）は、一九八〇年代最初から中期までに集められたものである。主として、中西部から収集され、アーミッシュ・キルトに特徴的な暗い深い色のものが多いが、一九三〇年代と一九四〇年代のより明るくはっきりした色のものも含まれている。

キルトが歴史を物語る

二〇一二年におこなわれていた展示は、アメリカ合衆国で歴史上特に人気のあるモチーフを含むキルト、アートとしてのキルトを追求する活動のなかで作られてきたキルト、およびインディゴインクの歴史を反映したキルトの三種から構成されていた。

移動してゆく人びとに贈られる「フレンドシップ・キルト」は、アルバム・キルト、シグネチャー・キルトともよばれ、新しいステップを踏み出す人びとの行く手の無事と繁栄を祈って、贈る人びと自身の名前を入れたキルトである。

また、第二次世界大戦中に作られた、「V」の字をモチーフとした「ビクトリー・キルト」や黒人奴隷の生活を描き出したキルトなどは、人びとの信条や考え方をキルトによって見るものに伝えようとしたものである。インディゴ・プリンティングの歴史と技術の展示では、さまざまなインディゴの色が美しいキルトを生み出してきたこと、そして、インディゴの色によりキルトの製作時期を推測できることなど、科学技術とキルトとの関係が提示されている。

キルトは、表布、裏布、中綿の三つを縫い合わせてベッドカバーなどとして実用的に用いられてきたものであるが、アメリカでは複数の表布を組み合わせたパッチワークが人気があり、一枚のキルトに何人もが参加して制作されることも多い。キルト好きなボランティアたちのことばは、キルトが、ひとつのコミュニケーション・ツールとして多様な人びとによって育まれてきた文化であることを感じさせるものであった。

博物館外観。著名な建築家によって設計された

自然の光のなかでキルトを見ることができる回廊

キルトの保管棚（現在研究中の中国のもの）

キルトに関する研究ミーティング

黒人奴隷の生活を描いたアート・キルト

多文化をあきなう

マヤビニックと歩んだ一〇年、これからの一〇年

山本純一（慶應義塾大学環境情報学部教授（FTP会長））
杉山世子（株式会社豆乃木代表取締役（FTP理事））

支援活動をおこない、それを現地の人びとともに軌道にのせるには、それなりの年月がかかるものだ。大学の研究室を母体とした支援団体がメキシコのコーヒー生産者とともに歩んだ一〇年と、これからのあらたな展開を紹介する。

先住民主体のカフェ、オープン

二〇一一年一二月一六日、マヤビニック（マヤの人）という名前の生産者協同組合（以下、マヤビニック）の自家焙煎（ばいせん）カフェがオープンした。場所は、メキシコ最南部チアパス州の古都サン・クリストバル市の歩行者天国の端。山本純一研究室が受託したJICA（国際協力機構）草の根技術協力事業の成果のひとつであった。

カフェのコンセプトは「最高のコーヒーを栽培、焙煎、抽出する」。コーヒー畑での栽培・収穫から精製、焙煎を経て、最終的なカップ提供に至るまでの垂直統合ビジネスを意識して議論を重ねて決定したものであった。そして、地元でもっとも美味しいと評判になり、開店初年度で黒字（純利益率七％）を達成した。店長以下、このカフェのバリスタ、焙煎士、ウェイトレスは、先住民の組合員もしくはその子弟で、自信と誇りをもって働いている。だが、このような光景は、一〇年ほど前の最初の出会いからは想像もできなかったことである。

出会いから学び合いへ

それは偶然だった。コーヒーとは全然関係のない調査で山本が訪れたチアパス高地の難民村のリーダーから、彼がマヤビニックの組合長で、コーヒー豆の輸出先に困っているとのメールを帰国後受け取ったのが始まりだ。そこでゼミ生と相談し、実験的にマヤビニックの焙煎豆を航空便で輸入し、渋谷のカフェにおいてもらうことにした。二〇〇三年のことだった。だが、評価は芳しくなく、売れ残ってしまった。

その後、学生が中心となって、生豆を輸入してくれるコーヒー商社も見つけた。しかし、学生の活動は卒業すると終わりになってしまう。そのため、二〇〇六年からは山本が代表となって設立した任意団体フェアトレード・プロジェクト（FTP）を通じてJICAの資金を獲得し、懸案であった焙煎豆の販売を促進するための技術協力（第一期）とカフェづくり（第二期）を支援することになった。

技術支援とはいっても、当初FTPは素人集団であった。そこで外部からコーヒーや飲食業界の専門家を理事や顧問として迎え、マヤビニックの人びとと一緒にわたしたちもコーヒーとそのビジネスについて学んだ。栽培、精製、焙煎、抽出、カップテースティング、コーヒーショップの経営などである。特にカフェの開店前は、「高品質高価格戦略」をめぐり、安さで勝負しようとするマヤビニック幹部とけんか腰で議論したこともある。

そのマヤビニックも、カフェをもち、顧客と直接接するようになって大きく変わった。自ら工夫するようになったのである。例えば、当初は出来合いのケーキを出していたが、一六歳の女性店員（中学生）がホームメードにして味をよくすると同時に、利益を上げるようになった。そして、FTPも変わった。卒業生が起業して、マヤビニックのコーヒーを日本で販売するようになったのである。

日本でのカフェづくりを目指して

山本ゼミの卒業生である杉山が株式会社豆乃木を創業したのは、大学を卒業して半年が過ぎたころだった。新興国とかかわるビジネスを興したいという願望はあったが、なかなか決断が下せなかった。FTPのメンバーとしてその活動に参加し、山本から背中を押されたということもあったが、決定的だったのは、日本国内のある農業従事者が発したことばだ。

「農家にとって一番嬉しいことは何だと思う。それは、作ったものが掛けた手間に見合った価格で売れる、という単純なことだよ」

このことばによって、杉山は自らがとるべき行動に気づかされた。新興国とのつながりを、支援者という立場ではなく、生産者のパートナーとして、まずはマヤビニックのコーヒーを日本国内で販売しよう、そう決意したのだった。

FTP関係者とロースター（焙煎業者）を含む関係者に支えられ、事業は少しずつではあるが、前に進んでいる。大変有り難いことに、取引相手のロースターは、このコーヒーの風味やもっている個性を評価し、継続して購入してくれている。それがフェアトレードであれば、尚（なお）よし、という具合に。だからこそ、今では、社会正義や慈悲に訴えるのではなく、「メキシコ産マヤビニック」というひとつの魅力あるコーヒーが、長く愛されるものとして、顧客の生活に根づくようプロデュースすることを心掛けている。

来春にはコンテナに詰まったマヤビニックの生豆が着港し、日本全国に届けられる。消費国側のパートナーとして、消費者ニーズを生産地に伝えることで、次の春も、そのまた次の春も、継続して安定的に取引をすることが双方の糧となり、信頼関係を高めるだろう。

さらに近い将来、生産者からダイレクトに届いた豆を、だれにでも美味しく飲んでもらえるような場所（カフェ）を日本にも設けたい。マヤビニックのコーヒーを口にした人が、その風味に魅せられ、未知の世界に目を向けるきっかけができるのなら……。

家の軒先で果肉を除去したあとのコーヒーを乾燥させているところ

メキシコのサン・クリストバル市の組合直営カフェ。豆の焙煎はもちろん、スイーツづくりにも着手し、観光客や地元の人で賑わいを見せている

コーヒー生豆の選別。マヤビニックのカフェでは、手で選別した最高級豆を使用している

コーヒーの白い花。チアパス高地では4月から6月ごろに開花し、11月から2月ごろに実が熟す

マヤビニックコーヒーの基礎となる土づくり

フィールドで考える

知り合いを助ける、見知らぬ誰かを助ける

浜田明範（はまだあきのり）
民博 機関研究員

一五の教会が存在しており、チレ・オドは、イースターやクリスマスといった年中行事や日曜日におこなわれる礼拝とともに教会の主要な活動のひとつになっている。

ガーナ南部でもっとも広範に話されているチュイ語で、チレ・オドは「愛を教えること」を意味する。それは、近しい親族を失った者や長いあいだ病気で苦しんでいる者に対し、同じ教会に通う信徒たちが集団でモノやカネを贈る行為である。そうすることで彼らに対する自分たちの「愛」を示すというのだ。

ガーナ南部で暮らす人びとの多くは農業や商業で生計を立てているが、これらの生計には月ごとに決まった額の収入がある訳ではない。働いた分だけが収入となる。そのため、親族の死や重病による働き手の減少は重大な経済的損失をもたらしうる。チレ・オドはひとつの不幸が更なる不幸へと繋（つな）がらないようにするためにおこなわれる、互いによく見知った者同士のあいだでおこなわれる助け合いである。

健康保険に加入すること

病気が重大な経済的損失をもたらしうることは、ガーナ政府もよく知っている。政府はこの問題に対応するため、また、経済的な理由から医療サービスを利用できない人の数を減らすため、国民健康保険制度を導入している。二〇〇四年に一部の地域で試験的に運用を開始したのちに段階的に実施範囲を広げ、加入者数も着実に増加している。地元の健康保険組合によると、二〇〇七年末の時点で、プランカシの含まれる郡では全人口の六一・九パーセントが健康保険に加入していたという。

一年ごとに決められた保険料を納めて健康保険に加入すると、その年のあいだ無料で医療サービスを受け、薬剤を受け取ることができる。保険の掛け金はそれほど高くなく、個々人が計画的に貯蓄をすれば無理なく支払える金額となっている。この背景には、二・五パーセントの消費税が目的税として設定され、その税金が各地の健康保険組合に投入されていることがある。これは健康保険に加入している者だけが税金の優遇を受けていることを意味しており、人びとも健康保険に加入することは得だと考えている。

健康保険が本格的に普及しはじめた二〇〇六年からの五年間で、町の診療所を訪れる患者の数は三倍以上になっており、人びとはこれまでよりも頻繁に医療サービスを受けることが可能になっている。診療所や病院の人手不足や掛け金の妥当性、公平性の有無といった問題も山積しているものの、ガーナの健康保険制度はアフリカにおける医療政策の先進的な取り組みとして注目を集めている。

一般的な保険と同じように、ガーナの健康保険は互いに見知らぬ人びとがお互いに医療費を融通し合う助け合いの制度でもある。保険に加入している患者の医療費を支払うのは各地の健康保険組合だが、その資金は原則的には他の大勢の加入者の掛け金によって賄われているからである。

人を助けるふたつの方法

知り合いを助けるチレ・オドは、日本で暮らすわたしたちには比較的馴染（なじ）みの薄い助け合いの形かもしれないが、類似の助け合いはアフリカの各地で見ることができる。一方で、わたしたちに馴染み深い健康保険は、アフリカではほとんど普及していない珍しい制度である。これらのふたつの助け合いは、どちらも病気によって引き起こされる経済的損失を補うものであり、集団から個人へとモノやカネを移動させるやり方である。

今日、ガーナで暮らす人びとはチレ・オドと健康保険をともに用いながら互いに助け合い、病気と苦境に対処している。「知り合いを助ける方法」と「見知らぬ誰かを助ける方法」の両方を駆使しながら生きているということが、わたしたちと同じ時代をガーナ南部で暮らす人びとの特徴なのかもしれない。

教会の前からチレ・オドの行進を始める女たち

チレ・オドでは、食料品が贈られることが多い

健康保険はさまざまな書類によって成り立っている

患者の増加に伴い検査設備も充実した

もし、「あなたにとって親密な関係にある人、心を開いている相手、愛情を抱く対象は?」と聞かれたら、一体誰を思い浮かべるだろうか。友人、同僚、恩師、後輩、はたまたペットの顔が浮かんだ人もいるかもしれない。だが、多くの場合、心に思い描いたのは「家族」ではなかろうか。

家族とは、従来から愛や情緒的絆で結ばれた集団で、互いにケア（世話・配慮・気遣い等）を授受する関係であるととらえられてきた。しかし、DVや児童虐待等、家族間での暴力が問題視されている現状をいま一度思い返して欲しい。「家族なのだから」と夫の暴力を耐え忍んできた妻が少なくなかったように、むしろ家族を親密さやケアと不可分とみなしてきたことが、個人の自由を奪い抑圧的に機能してきたのではないか。実際には、家族だからといって必ずしもそれが愛やケアで媒介される関係であるとは限らない。「親密圏」とは、こうして既存の家族像が解体され、親密な関係を家族に限定せず再定義していくなかで二〇〇〇年代以降急速に普及した概念であり、情緒的絆やケアによって結ばれた人びとの領域を意味する。

親密圏ということばの使われ方はさまざまであるが、グローバル化する社会をよりよく理解する際に用いられる場合がある。例えば、香港やサウジアラビアをはじめ、世界各地に出稼ぎしている家事労働者や介護労働者を思い起こして欲しい。彼／彼女らは、自身の家族のケアは母国の親族に委ね、異国の地でケアを提供しながら血縁関係のない子どもや高齢者とのあいだに親密な関係を築いている。いまや情緒的絆やケアによって結ばれた

そうだったのか！

人間学のキーワード

親密圏
Intimate Sphere

加賀谷 真梨　民博 機関研究員

領域は国を超えて拡大しているのだ。また、そうした移民の増加は、国家や市民社会に代表される「公共圏」にも同時に変化を促している。彼らが団結し現地のNGOを巻き込みながら労働条件の改善や労働者としての権利拡大を謳うなかで、国境を超えたグローバルな市民運動が勃興しているのがその好例だ。親密圏の拡大はそれと二項対立的にとらえられてきた公共圏をも揺るがし、よりグローバルなあらたな公共圏を創出しているのである。

また、親密圏は人間生活に必要不可欠な関係性とみなされ、家族以外の場にその創出が謳われることもある。高齢者福祉を担うボランティアや自助グループ等、家族の枠を超えてケアを授受する集団を「新たな親密圏」とみなす研究がそれだ。しかし、筆者はこうした論調には疑問を抱いている。例えば日本の脳死臓器移植において、当人の意思よりも家族の意思が優先されてきたように、日本の場合、個人の生の処遇権はその家族に委ねられてきた。それゆえ、いくら新たに親密な関係を形成したところで、家族が有してきた生の処遇権が易々とそこに移譲されるとは思えないのだ。実際に筆者の調査地では、地域住民がいくら高齢者をケアし在宅で最期を迎えられるよう尽力しても、最期をどこで迎えるかの決定権は高齢者の家族に委ねられたままである。新たな親密圏が家族に取って代わる可能性を模索するよりも親密圏と家族との相違に着目し、そこから家族とは何かと問うていくことの方が重要だと思われる。いずれにせよ、親密圏は家族を解体するなかで生み出され、また逆説的に家族の再定義を促すという点においても意味のある概念であることは間違いない。

異聞逸聞

中央アジアの日本人抑留者

藤本 透子（ふじもと とうこ）　民博 民族文化研究部

現地で語り継がれる記憶

第二次世界大戦後のソ連による抑留といえば、シベリア抑留が有名である。しかし、中央アジアにも日本人が抑留されていたことは、あまり知られていない。その数はカザフスタンで約六万人、ウズベキスタンで約二万人におよぶといわれる。日本における認知度の低さとは裏腹に、じつは中央アジアでは日本人抑留者の記憶が脈々と受け継がれている。

わたしがカザフスタンで初めて日本人抑留者について聞いたのは、一九九九年に留学のため現地に到着した日のことだった。滞在先のカザフ人女性がレコードをかけると、戦前のものとおぼしき日本歌謡が雑音のむこうから響いてきた。レコードは女性の両親が抑留者との物々交換で手に入れ、六〇年近く大切に保管してきたという。日本人抑留者は、鉄道の敷設、建物の建設、炭鉱労働などに従事し、ウズベキスタンのナヴァーイー劇場やカザフスタンの科学アカデミーなど今に残る重要な建物を建設したことで人びとに知られている。

日本人抑留者が建設したカザフスタン共和国科学アカデミー（ソ連時代から続く最高学術機関）

多民族状況を生きた抑留者たち

日本人が抑留されたこの地域は、複雑な多民族状況にある。カザフスタンにはロシア人が多いほか、第二次世界大戦前には政治的な理由から、朝鮮人、ドイツ人やカフカースの少数民族も強制移住させられ、戦後にはドイツ人捕虜や日本人捕虜が抑留されていた。年配のタタール人女性は、「四、五歳のころ、日本人が仕事場へと毎日トラックで移送されて行く後を、バンザーイ、バンザーイと叫びながら近所の子どもたちと追いかけると、日本人はみんな笑って手を振ってくれた。ドイツ人は怖い存在だったが日本人には親しみを覚えた」と語る。

一九五〇年代までに抑留者の多くは帰国したが、一部の人びとは取り残された。その一人である日本人男性はドイツ人女性とのあいだに二児をもうけたが、ソ連の敵国出身者として法的結婚は認められなかった。一九九一年のソ連崩壊にともないカザフスタンが独立すると、日本人男性の子はドイツに移住できたが、男性はともに移住できずやむなく日本へと帰還した。まさにこの多民族状況と政治変動の生き証人である。こういった日本人の中央アジア抑留をとおして、今に続くユーラシアの激動が見える。

制服の世界 THE UNIVERSE OF UNIFORMS 世界の制服

ダイビング・ショップのTシャツ

市野澤（いちのざわ） 潤平（じゅんぺい） 宮城学院女子大学准教授

業界ごとに制服はさまざま、もちろん制服のない業界もある。たとえば、ダイビング観光業界に制服はないだろうと思われるかもしれない。ところが、ダイビング・ショップごとのTシャツが、あたかもそこでの制服のようである。この制服は機能的であるのみならず、多分にビジネス上も重要である。

胸と背中から情報発信

世にダイビング・ショップは無数にあるが、そのスタッフたちは、いつでもどこでも、まるで判を押したように、ショップごとに独自の意匠をこらしたプリントTシャツを着ている。いわば、彼らにとってはそれが「制服」である。

Tシャツを制服とするのは、機能的に見て理にかなっている。ダイビング観光が盛んな場所の多くは暑いし、波しぶきを浴びるのが当たり前の仕事。しかもガイドやインストラクターは、いざ潜水となれば服を（パンツまで！）脱いでウェットスーツに着替えるのだから、厚ぼったい丈夫な制服は必要ない。

しかも、ダイビング・スタッフは、お世辞（せじ）にも高給取りとはいえない。毎日汗だくになり、海水に濡（ぬ）れる制服を、その都度クリーニングに出す余裕はとてもない。自宅でさくっと洗えて、面倒なコーディネートも必要ない、朝起きてから寝るまでショップTシャツの着たきり雀（すずめ）という生活は、財布にとてもやさしいのだ。

Tシャツは、ダイビング・ショップの重要な販売品

制服のもっとも重要な機能である「徴付（しるし）け」、つまり特定のショップの従業員であることを示す機能は、Tシャツであっても十分に果たすことができる。筆者が滞在していたタイのプーケットには、多数のダイビング・ショップがひしめいているが、誰がどこのスタッフかは、着ているTシャツを見れば一目でわかる。何しろ、ショップの名前が大きく書いてあるのだから。胸と背中の全面を情報発信に使えるのは、Tシャツを制服にすることの大きな利点であろう。筆者が某ショップの従業員として働きながら調査をしていたころ、仕事を終えて飲みに行く際には、ショップTシャツを着るのを控えたものだった。店の名前を掲げながら、酔っ払って醜態をさらすのはいかがなものか、という理由で。

リピーター作りの戦略

制服は通常、企業など特定集団の成員に限定して配布される。結果、集団の外部からは、その制服があこがれの的になったりする。警官や航空会社の客室乗務員の制服などは、手に入れたいと思うマニアも多いだろう。カネを出しても買えないという性質は、外部者による制服へのあこがれを強める。

対してダイビング・ショップのTシャツは、一般に販売されている。あるショップを利用した客は、従業員の制服であるはずのTシャツをおみやげとして気軽に買い求めることができる（Tシャツだけに値段も安い）。つまり、制服としての排他性が弱いのだが、そこにはショップ側の戦略がある。

Tシャツが売れれば、店の売り上げが増える。のみならず、買い求めた客に、「同じ制服を着る者同士」という一体感を植え付けることができるのだ（プロ野球チームのユニフォーム販売と似ているかもしれない）。販売されることでTシャツの排他性は薄れるが、消え去るわけではない。「従業員と同じTシャツを着る自分は、他のお客さんとは違う」――自らは「特別」だという意識を客にもってもらうのは、リピーター作りの第一歩。Tシャツは、そのための重要な小道具なのだ。

だから多くのショップTシャツが、派手でごてごてしているのは、勘弁してあげてほしい。素人のスタッフが「その店の独自の意匠」をデザインするのは容易でないから、いきおい洗練からは遠ざかる。そして何より、ファッションとしては微妙な、おかしな柄であるほど、そのTシャツを着ている客の「特別」感は強まるのだから。

インストラクターを挟んで、客もおそろいの「制服」

ショップ・スタッフによる工夫を凝らしたデザイン

船上では朝から夜まで、このＴシャツで過ごす

誕生日や記念ダイブの際には、皆で寄せ書き

9月

みんぱくウィークエンド・サロン

研究者と話そう

■ 14 時 30 分から 15 時 30 分
■展示観覧料が必要です。
※都合により、予定を変更することがあります。

国立民族学博物館（みんぱく）の研究者が来館された皆様の前に登場します！
「研究について」「調査している地域（国）の最新情報」「展示資料について」など、話題や内容は実に多彩。
どんどん質問をおよせください。展示場でお待ちしております。

1日（日曜日）
話者：竹沢尚一郎（国立民族学博物館 教授）
話題：アトランティック・ヒストリーと西アフリカ
会場：本館展示場（アフリカ展示場）

22日（日曜日）
話者：木村裕樹（龍谷大学 非常勤講師）
話題：【特別展関連】
アチックミューゼアムの民具コレクション
会場：特別展示館

29日（日曜日）
話者：出口正之（国立民族学博物館 教授）
話題：みんぱくの「磁力」を考える
――音楽の祭日を事例に
会場：本館展示場（ナビひろば）

1年間みんぱくに何度でも入館できる「みんぱくフリーパス（3,000円）」をご利用ください。

本館展示は何度でも無料で入館できます。他にも、みんぱくを楽しむための特典がいっぱいです。

特典◆本館展示の無料入館◆特別展示の観覧料割引
◆みんぱくミュージアム・ショップとレストランの10%割引
◆万博記念公園内および周辺施設での利用割引　など。
詳細については、一般財団法人千里文化財団までお問い合わせください。
（電話06−6877−8893／平日9：00 ～ 17：00）

編集後記

台湾とは直接の関わりがなく、旅行をしたこともないので、どうもイメージがわかない。中国本土にも行ったことはないのであるが、上海、北京などはなんとなく想像できる。台湾人は親日派と聞くし、一度行くと、その魅力にはまってしまう人も多いらしい。それでも私の中では、なんだかつかみどころがよくわからず、もやぁっとした場所なのである。

研究上の接点としては、中東研究の偉大な先学である前嶋信次先生が日本統治下の台湾に12年間おられたことがある、ということぐらいか。個人的なつながりといえば、私が子どもの頃、商社マンである叔父が台湾に転勤になり、従妹たちが中国語が話せるようになって帰ってきたことが不思議だったことである。台湾を一番身近に感じたのは、西表島に行ったとき。那覇よりも台湾の方が近いということを知って、驚いた。

台湾人が日本を知るほど、日本人が台湾を知らないのはなぜなのだろう。企画展を見ながら、よく考えてみよう。

（山中由里子）

●表紙　機を織るクヴァラン族の女性（19 世紀末頃）
背景は、バナナ繊維性男性用長袖上着、
標本番号：H0274441、地域：台湾、民族：クヴァラン族

次号の予告

特集
武器をアートに

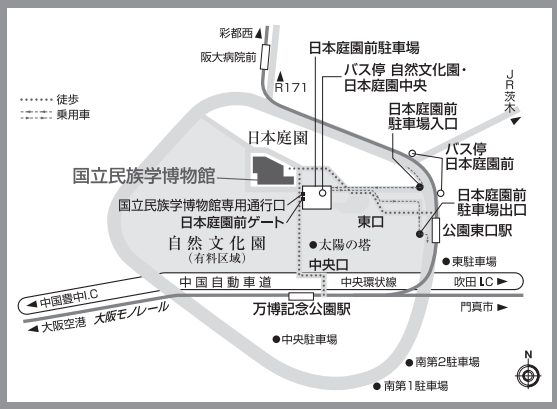
月刊みんぱく　2013 年 9 月号
第 37 巻第 9 号通巻第 432 号　2013 年 9 月 1 日発行

編集・発行　人間文化研究機構 国立民族学博物館
〒 565-8511 大阪府吹田市千里万博公園 10-1
電話　06-6876-2151

発行人　八杉佳穂
編集委員　山中由里子（編集長）　樫永真佐夫　久保正敏　庄司博史　菅瀬晶子　丹羽典生　野林厚志
編集アドバイザー　山内直樹
デザイン　宮谷一款
制作・協力　一般財団法人 千里文化財団
印刷　日本写真印刷株式会社

＊本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報係にお願いします。

＊本誌掲載記事の無断転載を禁じます。



交通案内
●大阪モノレール「万博記念公園駅」・「公園東口駅」下車、徒歩約15分。
●阪急茨木市駅・JR茨木駅から近鉄バスで「日本庭園前」下車、徒歩約15分。
●自家用車は、公園内の「日本庭園前駐車場」（有料）から徒歩約5分。「日本庭園前ゲート」横にある民博専用通行口をお通りください。
●タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れできます。

みんぱくホームページ
http://www.minpaku.ac.jp/
みんぱくフェイスブック
http://www.facebook.com/MINPAKU.official/